フィールド（現場）からの風 827

宮田守男

今日は、正月に年神様を迎えるための準備を始める日とされる「正月事始め」。神社などで、笹竹の先に葉やわらを取り付けた「煤梵天（すすぼんてん）」で神社を清掃する「煤払い」の情報が伝わってくる。この時期から大掃除を始め年末ぎりぎりまで行った時代とは異なり、今は高齢者世帯では終活も視野にいれながら不要になっていく物の片づけを考えるとの話が聞えてくる。

わが家では親しい知人に果実専門農協「共和園芸農協」から毎年リンゴを発送してもらうのだが、10月の申し込み日に今年は「特秀」サイズの出荷はできないとの案内を受ける。今年も高温の影響が顕著で、特に赤色系リンゴの着色不良と日焼果（夏の日焼け果実）の発生が多い。長野市では今年25度以上の夏日は、4月に始まり10月までの7カ月にわたって出現し、1年の半分以上が夏の気候になっているからだと。

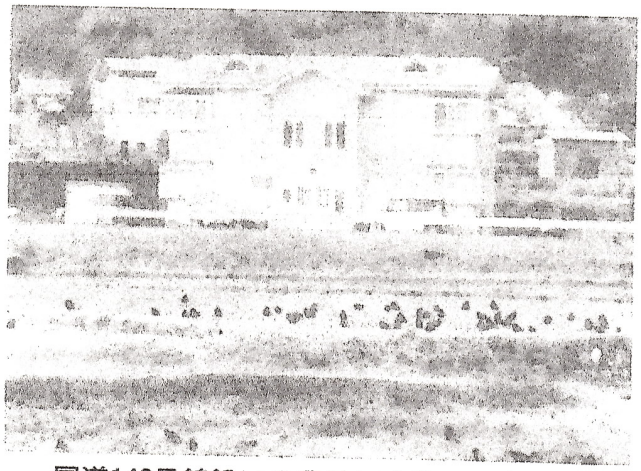
リンゴから温暖化の影響を考えよう

長野県果樹試験場では「長野県における2040年代の気候温暖化を想定したりんご生産の実態解明」の研究に着手しているが、元共和園芸農協代表理事組合長・岡澤賢朗さんは「100年以上掛けてりんごの産地化、ブランド化を実現してきたものを、生産者の高齢化・後継者不足が進行している中で、一朝一夕に他の高温に強い作物に転換と言ってもおよそ不可能」「高温の影響が少ない黄色系のおいしい品種などを中心に、農家が極限まで頑張るしかない」と農中総研・調査の情報誌で伝えている。

農林水産省が発表した「農業生産における気象変動適応ガイド（りんご編）」で、地球温暖化による影響として高温・大雨・台風・暖冬を挙げ、特に高温はリンゴ栽培に最も影響が大きく、今後の気象上昇によっては、効果を発揮しなくなる時期が来ることも念頭に置く必要があると記されてもいる。適地栽培とされている長野県産の野菜、果樹は多いが、適地でなくなる前提で取り組めとの提言が具現化しないことを祈るばかりだ。

写真のカラスだが、中国の故事に「烏（からす）に反哺（はんぽ）の孝あり」がある。「成長したカラスは親に口移しで食べ物を与える。カラスでさえ養育の恩返しをする。だから人はもっと親孝行をすべきだ」との教えだ。集団のカラスから、同居して親孝行する社会の世帯の在り方を考えてはどうだろうか。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）



国道148号線沿いの農地にカラスの大群、観方（みかた）を考える事が大切だ